

専修大学社会科学研究所 2013年度春期合宿研究会（長野県飯田市）を終えて

村上 俊介

2013年2月25日から27日まで、社会科学研究所は恒例の春期合宿研究会を、今回、長野県飯田市の地域活性化の取り組みの視察を中心において実施した。実施に当たっては研究会担当の宮崎晃臣所員と、飯田市長と知己の平尾光司参与が周到に準備を行なってくれた。

飯田市での聞き取り調査は、市役所と飯田信用金庫で行なった。まず、市役所では牧野光朗市長をはじめ、産業経済部農業課・酒井郁雄課長、林健吾係長、企画部企画課・上沼昭彦係長、水道環境部地球温暖化対策課・佐藤寛也主事（氏は飯田市の大学連携事業の一環として京都大学大学院から出向している）などからレクチャーを受け、飯田信用金庫では営業統括部経営相談所林郁夫所長、中村達氏、および、しんきん南信州地域研究所・吉川芳夫主任研究員などの方々からレクチャーを受けることができた。とりわけ牧野市長には、お忙しい中を、夜の懇親会にまで参加いただき、その席でも打ち解けた形ながら、有益なお話を伺うことができた。

市役所での聞き取り調査では、行政の現状だけでなく、飯田市の環境行政と関連の深い民間組織の方にも出向いていただいた。公益財団法人南信州・飯田産業センターの木下幸治氏、おひさま進歩エネルギー株式会社代表取締役・原亮弘氏から、われわれにもとりわけ関心の深い環境保全や自然エネルギー活用のシステム化について、その貴重な経験を聞くことができた。

こののち、われわれは長野県下伊那郡阿智村に移動し、2013年4月に開館したばかりの「満蒙開拓平和記念館」にて、そこで同記念館運営委員の小林勝人氏（飯田日中友好協会事務局長）、三沢亜紀記念館事務局長のお世話になり、とりわけ満蒙開拓団の家族の一員として、その後の苦難の人生を送られた「語り部」中島千鶴さんのお話を聞くことができた。

そして最後に、地元の元気な企業として下伊那の干し柿を主力商品として、都市の市場相手に成長する「かぶちゃん農園」を訪問し、代表取締役・鏑木武弥氏のお話を伺った。

お忙しい中、貴重な時間を割いてわれわれの求めに丁寧に応じて下さった、これらの方々に、ここに記して謝意を表したい。

この春期合宿研究会で私自身の印象に強く残ることが二つあった。一つは飯田市の行政と地元企業および市民との関係である。牧野市長によると、政策立案に当たっては、市民や地元企業の自発性が発揮されるような手順、あるいは仕組みを作ることに心を配るとのこと。それは「飯田市自治基本条例」の中で、市民の市政参加、市民と市の協働が銘記されていることにもうかがえるし、その仕組みの一つとして自治会組織や、飯田市固有の伝統である「公民館運動」を

地域自治活動に有機的に組み込んで、その活性化の工夫を凝らしていることに見ることができ
る。

また「おひさま進歩エネルギー（株）」の活動も、そのモデルの中にある。この会社は市民・
法人の出資によって市の保育園・公民館・児童センターなどの公共施設に太陽光発電設備を設
置し、そこで発生した電力を一定価格で市が「おひさま進歩エネルギー」に支払い、余剰電力
は中部電力に売電、その利益を出資者に配分するという事業と、個人が初期資金なしで太陽光
パネルを自宅に設置し、9年間「おひさま進歩エネルギー（株）」に分割支払いをしつつ、余剰
電力を売電するという事業の、2本柱で事業展開している。この場合、環境省のモデル事業と
しての補助も利用しつつ、とりわけ飯田市の側でも「行政財産の目的外使用」を認める制度作
りが必要となり、そうした枠組み作りの上で、「おひさま進歩エネルギー（株）」と電力買い取
り契約を行なうという、両者の「協働」モデルが作り上げられている。もちろん「飯田信用金
庫」もこれに呼応して融資を行なっている。

牧野市長は、市民の有志による積極的な発議を重視し、それを受け取って行政として対応で
きることを行なうことが重要であることを力説されていたが、こうした「協働」モデルを明確
な言葉にして発信されていることが、何より印象的だった。

もう一つ強く残った印象は、開館して間もない「満蒙開拓平和記念館」でのことだった。日
中戦争下での「満州」開拓団と、満蒙開拓青少年義勇軍の数は、長野県が全国でも最も多く、
いただいた資料によると前者が31,264人（全国合計220,255人）、後者が6,595人（同101,627
人）である。さらに長野県3万人余のうち、下伊那・飯田地区が約8,400人と、他の地区に比
べて飛び抜けて多い。これは戦前に盛んであったこの地区の生糸生産が昭和恐慌で大打撃を受
けたことが原因だとのこと。

記念館訪問の前、私はこうした記念館にあり得る傾向として、開拓一敗戦一逃避行・帰国と
いう悲惨な事実（それ自体は全くの事実である）の記憶・記録を、戦争被害者としての側面か
ら展示するものであろうと予想をしていた。しかし運営委員小林氏と、また「語り部」中島さ
んのお話では、国策「満蒙開拓団」が、中国の当地の人々にとっては農地を奪う存在でしかな
かったことを、きちんと説明されていた。その点で、それぞれの個人史上の苦難や悲惨と、大
きな視点からの歴史上の意味をバランスよく考慮された記念館であるとの印象を持った。

今回の春期実態調査（飯田市）は、22名という通常よりも比較的多くの参加者を得て実施さ
れた。ここで私が抱いた二つの印象について、あるいは別の論点について、以下ではその参加
メンバーたちが、より詳しく報告をする。